

# 伊能忠敬『測量日記』にみる19世紀初頭における 讃岐国本土の地域特性

井村博宣\*

## Regional Characteristics of Mainland Sanuki Province in the Early 19th Century Based on Tadataka Ino's Sokuryo-nikki (Survey Diary)

Hironobu IMURA\*

(Accepted November 10, 2023)

Ino Tadataka was the first person in Japan to conduct a scientific survey of the entire country and to create an accurate map of Japan, and he had a high level of geographical knowledge. Sokuryo-nikki (survey diary) was written by Tadataka Ino as an official journal of his nationwide surveying activities. The regional characteristics of each area can be gleaned from the descriptions in Sokuryo-nikki. Therefore, in this paper, the writer analyzed the regional characteristics of the mainland Sanuki Province based on the descriptions in Sokuryo-nikki. The results are summarized as follows.

Regional special and supplementary descriptions including regional characteristics accounted for 31.0% of the total, with descriptions of famous and historic sites such as Matsuyama, Matsugaura (utamakura; repeatedly quoted in waka poems), Kumoi-no-gosho (Kumoi imperial palace) and Dannoura (Genpei ancient battlefield) showing the regional characteristics of mainland Sanuki Province. And visiting Konpira Shrine and visiting 88 shrines in Shikoku can be seen as regional characteristics. In addition, the village headman was called "Shouya" in the Marugame and Tadotsu domain, but "Mandokoro" in the Takamatsu domain, indicating regional differences.

**Keywords :** Tadataka Inoh, Sokuryo-nikki, mainland Sanuki Province, early 19th century, regional characteristics

### 1. はじめに

歴史地理学では、これまで古文書・古記録等に基づき過去の景観や環境等を復元し、分析に用いてきた（籠瀬1995）<sup>1)</sup>。籠瀬は、劇作家チェーホフの1890年樺太踏査に関する研究を進めるなかで、書き手（記録者）が有する地理的素養の重要性について指摘している。これは復元に用いる資料の吟味を進めるうえで、重要な判断基準の一つと言える。

金坂（2012・2013）<sup>2)</sup>のイザベラ・バードの旅行記訳本は、英国地理学会から特別会員として認められた同女氏の記した『日本紀行』を用いたもので、先述の籠瀬の示す基準に適合する。加えて金坂氏の高い学識と語学力に基づく正しい翻訳により、イザベラ・バードの目を通して、明治初期における北日本や関西地方の景観等を正確に復元する名著である。また、日本人の記した旅

行記の代表に松浦武四郎の日誌『三航蝦夷日誌』・『東蝦夷日誌』・『西蝦夷日誌』があり、片上（1992）<sup>3)</sup>は同日誌に基づき東西蝦夷地の地域構造を考察している。これらの研究で用いられた資料は、いずれも書き手の地理的素養が高く、江戸後期から明治初期の日本の景観や環境等を把握する貴重な資料であり、これらに基づく研究成果も高く評価されよう。しかしながら、全国各地の地域性について比較検討する場合、その記述が特定地域に限られている。一人の書き手を通し、いわば「同一の視点」あるいは「一定の統一的な規準」に基づいて全国各地を比較し、地域性を考察するには、資料として課題が残ると言えよう。

この課題について改善・一定程度の解決が図れ、かつ最も古い資料としては、伊能忠敬の『測量日記』が挙げられる。伊能忠敬は、言わずもがな日本で最初に科学的

\*日本大学文理学部地理学科：  
〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40

\*Department of Geography, College of Humanities and Sciences,  
Nihon University, 3-25-40, Sakurajosui, Setagaya-ku, Tokyo, 156-8550, Japan

な全国測量を実施し、正確な日本図を作製した人物であり、地理的素養も高い。しかも、彼が測量の際に記した『測量日記』には、北は北海道（太平洋岸を中心に東蝦夷地ニシベツ）から南は九州（屋久島）まで、全国の海岸線や主要街道に沿った、約4万kmにも及ぶ広い地域が記載されている。筆者は、伊能忠敬の測量・地図作製や『伊能大図（米国）彩色図』<sup>4)</sup>を用いた近世の環境復元など伊能図研究の一環<sup>5)</sup>として、『測量日記』に着目し、まず讃岐国（以下、令制国の「国」を省略する）島嶼部（井村2011）<sup>6)</sup>、次いで仙台領沿岸地域（井村2012）<sup>7)</sup>を対象に、前者は佐久間氏活字本<sup>8)</sup>、後者は国土地理院所蔵写真複製本<sup>9)</sup>を用いて、記述内容と形態や項目別字数の割合等を指標とし、定量的に把握したうえで、とくに特記事項に留意し分析する方法論の確立を目指しながら、それぞれ地域特性について考察してきた。

そこで本稿では、こうした研究成果を踏まえたうえで、仙台領の報告（2012）にて一定の成果をみた研究方法に基づき、より記述内容の増した地域に応用し精度を高めるため、讃岐の報告（井村2011）では取り上げなかった本土を対象とし、比較的容易に閲覧・利用できる先に島嶼部の分析で使用した佐久間氏活字本を用いて、19世紀初頭における地域的特性について考察した。

## 2 測量日記の指標性

前回の報告（井村2012）にて吟味したが、分析に用いる重要な基礎資料であるため、ここで改めて伊能忠敬と彼の記した『測量日記』の資料的価値について確認しておきたい。

まず、書き手の伊能忠敬は、科学的な観察眼を有しており、籠瀬（1995）の指摘する高い地理的素養を備えた人物と言える。伊能忠敬は、測量においては誤差の最小化に努め、地図製作においては測量時に現場で目視し確認したものか否かの違いが誰でも理解できるよう、明確に分けて表現している。たとえば、彼自身、そして誰しもがその存在と広がりを知る大坂の中心部でさえも、測量の際に、建物の影に隠れて目視し確認できなかった範囲は、市街地の真ん中であっても空白に残している。同様に、神崎川・中津川・淀川・木津川などの流路も断続的に描いている。さらに船中引縄海岸測量を実施した松島湾等の測線内側の湾奥部や測量していない加茂湖（佐渡）等の水域は、絵画的に描き色調も変えることで、一目でわかるよう表現している<sup>10)</sup>。これらは、当時としては珍しい科学的な作図姿勢と言えよう。

次に、伊能忠敬は公儀御用にて全国を測量して巡り、各町・村・浦・浜の役人等から地域の情報を提供しても

らえる立場にあった。さらに伊能忠敬記念館には、彼が用いた備前・長門・筑後等の地誌書も残る<sup>11)</sup>。加えて、彼は家業の酒造業・米穀販売業・舟運業・貸金業や農業経営においても優れた業績を残した経営者でもあり、経済事情にも詳しいほか、名主を勤めた経験から地方行政にも明るいと言えよう。また義父景利は富士山宝永噴火降下物（テフラ）を採取し標本として残した<sup>12)</sup>うえて噴火の推移を日記に書いたり、村政記録を編纂したりしており、記録の重要性について少なからぬ影響を及ぼしていたものと解される。高橋至時に弟子入りして、天文学を学び、全国を測量し極めて高い精度の実測図を作製した偉業から、忠敬が優れた記憶力、理解力、分析力等の持ち主であることは言うまでもあるまい。

最後に、資料としての『測量日記』についてみることにする。伊能忠敬が全国測量の際に書き記した日記には、『忠敬先生日記』と『測量日記』の2種類<sup>13)</sup>がある。前者は日々現地で記されたもの51冊、後者は後日江戸で書き直されたもの28冊である。両日記は、幕府御用測量を司る測量隊長が職務の一環として日々の遂行業務内容等を記録したもので、とくに清書された『測量日記』は公開される（人目に触れる）ことも念頭に入れて書かれた業務日誌の性格を帯びており、全国測量を伝える貴重な古記録である。記述内容は毎日の天気、止宿の出発・到着時刻、測量区間、測量者、天測の有無、付添役人・来訪者、止宿が定型として記載されており、これらに適宜集落、来訪者、測量、名所旧跡等が特記事項として加えられている。このうち後者の特記事項には、伊能忠敬を通して見た全国各地の地域特性に関わる記述が多数含まれている。伊能忠敬記念館所蔵の直筆原本では、特記事項は2行取り、注記部分字下げ、改行・行アキやルビ振りなどの形式にて記載されている事例が多く、判別の手がかりとなっている。

なお、本研究にて用いた佐久間氏活字本『伊能忠敬測量日記』（1998）についても説明しておきたい。同活字本では、特記事項を記した2行取り部分が丸括弧書きされ、ルビ振りもなされており、かつ活字化されているため近世のくずし字に慣れていなくても講読しやすい特徴をもっている。さらに私家本ながら、全国の大学や国公立の図書館で広く所蔵されている。図書館蔵書検索サイト（カーリル）では全国296館、CiNii Booksでは110大学図書館等が表示される。これらには含まれない地域でも県立図書館・主要国立大学図書館を個別に検索すると、山形・富山・沖縄を除いた44都道府県にて蔵書されており、閲覧が可能である。たとえば、今回取り上げる香川県の場合、東讃地方では香川県立図書館と高松市

図書館、西讃地方では丸亀市立図書館と四国学院大学図書館（善通寺市）にて、それぞれ閲覧可能である<sup>14)</sup>。

### 3 讃岐本土の記述

讃岐における測量の記述は、伊能忠敬記念館所蔵の国宝・直筆本では表題『測量日記十三』（国宝、原題『戊辰沿海日記 下巻』）に、また今回分析に用いた佐久間氏活字本『伊能忠敬 測量日記』では「第2巻 四国沿岸・大和路（第六次）測量篇」に記載されている。その記述は、讃岐入国前の8月20日「讃州丸亀京極能登守郷手代辻順右衛門来向」から11月11日「久米栄左衛門帰る」までみられるが、本来の同国内における記述については文化5年9月9日～同11月5日（グレゴリオ暦：1808年10月28日～12月21日）の「同九日、曇天、朝六ッ半川之江村町出立。我等・下河辺・青木・稻生・藤吉、讃州豊田郡菰浦、去七日測留より初」から「同五日、朝晴天、西風、六ッ半前引田村出立」までである（句読点と中黒は筆者による。以下同様）。この間に記された文字数は14,792字であるが、9月8日～同11日にかけて測量隊を二手に分け、標題「坂部・柴山・文助・佐助、予州川之江村より笹ヶ峯へ手分」で同時並行実施された大規模な四国島横切測量（土佐・高知一伊予・川之江間の伊予側：笹ヶ峯一川之江間）の特記部分を除く、実質的な文字数は14,249字となる。

その内訳をみると、本土（7,481字、52.5%）に比べて島嶼部（6,768字、47.5%）の占める割合が高く、これが讃岐における記述の特徴の一つとなっている。とりわけ塩飽諸島の人名制に関する記述内容の濃さと量の多さは顕著である。豊臣秀吉「太閤秀吉公」、徳川家康「東照権現様」、徳川秀忠「台徳院様」が、それぞれ御用船方650名に塩飽1,260石の領地を認めた朱印状は紙面を割いて書き写されており、また人名（船方、人名株で世襲）から選ばれた年寄4名を中心とした政治、自治<sup>15)</sup>の仕組み等について書き留めている（井村、2011）。

さて、19世紀初頭における讃岐本土の地域特性を考察するため、先の報告（井村2011、2012）を参考に、『測量日記』の記述内容を項目別に整理すると、①日付、②天候、③出発地・時刻、④到着地・時刻、⑤測量区間・担当者、⑥天測、⑦地名補説、⑧集落補説、⑨支配・所領補説、⑩起点補説、⑪測量方法補説、⑫遠測、⑬地図作製、⑭書状等、⑮移動、⑯病気、⑰付添役人、⑱付添役人補説、⑲特定人物、⑳止宿・主人、㉑止宿補説、㉒中食場所、㉓中食場所補説、㉔名所旧跡、㉕寺社・参詣、㉖産業・商品、㉗贈物に区分される（表1）。

このうち、①～⑯は（1）測量業務（3,748字、50.1%）を、

⑰～㉓は（2）受入態勢（2,312字、30.9%）をそれぞれ記した内容であり、その大部分は全国一律に設けられた定型（広義）のものになっている。一方、㉔～㉗については、ほかの巻（冊子）、地域とは異なる内容であり、地域性を考察するために重要となる（3）地域特記事項（1,421字、19.0%）が書かれたところと言える（図1）。但し、前述の（1）測量業務と（2）受入態勢の記述のなかにも、狭義の定型のもの〔（1）①～⑯と（2）⑰・㉔の合計5,160字、69.0%〕のほか、補足説明〔（1）⑦～⑯と（2）⑱・㉒、㉔～㉓の合計900字、12.0%〕もみられる。これらの補足説明も、伊能忠敬が該当地域・事象を把握するため等の理由にて付記したものであり、地域性を読み取る手がかりの情報が含まれている。そこで、『測量日記』に基づき地域特性を考察するには、（3）地域特記事項に（1）測量業務・（2）受入態勢（付添役人・来訪者、止宿等）の補足説明を加えた「地域特記・補説事項」（2,321字、31.0%）を中心に、地域情報を抽出し分析する方法が最も合理的である（図2）。

### 4 地域特性

前章にて述べた通り、「地域特記・補説事項」には、19世紀初頭における讃岐本土の地域特性を把握し分析するために重要な地域情報が含まれている。その内訳は、地域特記事項が1,421字（61.2%）と最も多く、次いで測量業務の補説が759字（32.7%）、止宿等の補説が72字（3.1%）、付添・訪問者の補説等が69（3.0%）と続いている（表2）。そこで以下、本章では文字数の多い順番に、それぞれ地域情報を抽出し分析して、往時の地域特性について検討したい。

#### 1) 地域特記事項

地域特記事項の内訳は、贈物923字（39.7%）、名所旧跡343字（16.4%）、社寺・参詣136字（4.3%）、産業・商品19字（0.8%）となっている。

#### （1）贈 物

1804（文化元）年に『日本東半分沿海地図』が徳川家斉の上覧を受けたのち、伊能忠敬は幕府御家人に登用され、また彼の全国測量も第5次測量以降幕府直轄事業へと格上げされたことで、測量で訪れる沿道の領主等より測量隊に贈物が届くようになった。この動きは第6次測量以降本格化し、四国では諸大名（藩主）等より沢山の品物や現金が贈られている。

本稿にて取り上げる讃岐の場合、讃岐入国前の8月29日に「讃州高松家中久米栄左衛門菓子箱持参来向」を除き、贈物は丸亀藩（京極家5.1万石）、同支藩多度津藩（多度津京極家1万石）および高松藩（松平家12万石）の3藩



## 井村博宣

表1 讃岐国本土の項目別記述内容

測量(定型)				測量(橋院・直接)		測量(橋院・間接)										
日	付	天 候	出発地・時刻	到着地・時刻	測量区画・担当者	天 測	地 名	集 落	支配・所 属	起 点	測量方法	測 点	地図製作	書 状等	移 動	病 気
1	同九日	曇天 此夜大曇	朝六時半川之江村 立上	和田浜村へ四ッ 半頃に着	我等 下河辺 青木 稲生 藤吉 豊田 豊田豊満 より初 養浦村 郷浜民地大平木 和田村 郷浜村入口迄測		町	海辺奥人家三軒		去七日測量						
2	同十日	朝曇天														
3	同十一日	朝より晴天														
4	同十二日	此夜曇天	朝六時半観音寺 立上	四ッ半前観音寺 中浜浦へ着	我等 下河辺 青木 郷浜村入口より初 花橋村 山田民村 観音寺満 夜渡浦 有明浜迄測			観音寺通入へ南 坂 屋浦 中浜浦 下市 浦 上市浦 湯屋町 茂木町 最澄分 大 工分 後本村 合八 ヶ所小野ゆえ合 一 町とす 野尻入は別 々なるよし		去七日測量					坂部 岸山 文助 佐助 川之江村より 舟乗船して 同前浦浦へ 着	第八日より 出勤
5	同十三日	朝晴天風雨 此夜 雨より五ッ前近大 曇		前後手共四ッ半 頃にて尾村着	何屋浦 有明浜より初 室本浦 仁尾村下迄測			五ッ頃雲間に 七八星測		三野郡				非分測 夜等 下河辺 岸山 稲生 青木は見取 留先行		
6	同十四日	朝曇天 八ッ前曇 八ッより雨	六ッ半頃 仁尾村 立上	我等は五ッ半頃 赤組は四ッ後 白組は九ッ頃大 浜浦着	赤組坂部 岸山 藤吉 大浜浦持丸山崎一周を測 白組下河辺 青木 文助 善八 仁尾浦より初 家ノ浦 大浜浦枝部 を越 大浜浦海辺迄測		人家海岸より奥二三 丁に有			八家海岸より奥二三 丁に有	手分			昨夜深更屋 局用状相鑑 く今朝坂 部より誤取		
7	同十五日	朝大曇天 雨雨 終日曇る 此夜も 曇る 子夜より 段々に晴る						測量の用意を 成								
8	同十六日	朝晴天	先手白組下河辺 生 藤吉 七ッ 半頃大浜浦立上 別手青組我等 岸 山 文助 庄作 朝六ッ後 後手 組坂部 青木 善 八 朝六ッ半後	共に九ッ後松浦 へ着 横浦へ着	三野郡庄内組生里浦の内仁老より初 箱ノ三崎を 箱浦の内 字水の越迄測 三野郡大浜浦立下より初 大浜浦の内枝部 越 越 横浦枝部田 より箱浦を越 箱崎へ迄 箱浦字水 ノ越にて 生里浦を越 同浦枝に老沢迄測 白組の初		人家十五六軒 人家 六軒									
9	同十八日	朝晴天	七ッ半頃 妻崎出 立上	赤組は九ッ頃白 組は九ッ後松浦 付着	白組我等 下河辺 青木 稲生 大浜浦字箱崎 より初 大浜浦の内字海老 横濱 香田村 それより段間村字須田 新浜海辺赤組印へ越き それより段間村内高迄 段間村枝部生 ノ高迄測 赤組の初に 赤組坂部 岸山 文助 善八 段間 村字須田高松浦より初 段間村内高迄 段間村内高迄 段ノ着 約 沙木 吉津村の内字下 下高瀬村 多度津領松崎村同枝本浦を 越 大見村の枝久保迄測		人家二三軒 人家一 軒 人家五六軒		京極寺松 寺守居	十六日測量	横切 合測			夜終より出 勤		
10	同十九日	朝晴	七ッ半後 松崎村 立上	四ッ後多度津へ 着	白組我等 下河辺 青木 稲生 大浜浦字箱崎 より初 大浜浦の内字海老 横濱 香田村 それより段間村字須田 新浜海辺赤組印へ越き それより段間村内高迄 段間村枝部生 ノ高迄測 赤組の初に 赤組坂部 岸山 文助 善八 段間 村字須田高松浦より初 段間村内高迄 段間村内高迄 段ノ着 約 沙木 吉津村の内字下 下高瀬村 多度津領松崎村同枝本浦を 越 大見村の枝久保迄測		海辺より四十丁より あり 海辺より人家 へ一町あり		京極寺松 寺守居	手分	松崎村横島 大見村津島 通測					
11	同二十日	大曇天 セツ晴より 雨 夜は大量	朝六ッ半頃 多度 津立上	四ッ半頃に丸亀 立寄 丸亀 城下へ四ッ半 に着	坂部 岸山 青木 文助 善八 同所より新野村 堀江村 それ より丸亀城下置下余村 堀江村を越 丸亀城崎町海辺 ①印を残し 鶴足丸亀の西平山 北平山御供所 土原村 高松嶺土原村海辺迄測 それより引降し②印より過町を丸亀 城下所迄測						此日一手の 測	上馬崎下馬 崎通測	我等 下河辺 稲生 地蔵佐助			
12	同二十一日	朝七ッ前より晴天 此夜曇る	朝六ッ半頃丸亀城下 立上	先後一回四ッ半 頃金比羅松浦内 内町へ着	赤手赤組坂部 岸山 文助 善八 郡前高松嶺寺北村字寺原 より初 同傍公文村 それより左は高松嶺 西は丸亀嶺御供所 それより高松嶺高松嶺 それより大久大之丞源代菅田所付村 塚村村 同傍村横測 それより金比羅寺嶺松崎町に三門の坂下 迄測 後手白組下河辺 青木 稲生 佐助 那賀郡丸亀城下 過町所より初 高瀬村 堀江村 青木町 上南条村 農人町 同傍村を過 中府村 山北村 高松嶺御供所村 郡原村 三 軒 寺北村支所迄測			金屋社 郡 郡 印三三三 十石		手分 赤手 の初に合測						
13	同二十二日	朝晴天	それより松崎村 内一回立上	九ッ後丸亀へ帰 着												
14	二 日	朝より晴天 今夜 青曇る		坂部 文助 善八 稲 生 佐助 共に 乗船 ハッ頃鶴 足郡高松嶺寺北 村へ着 等は 共に午後 乗船しハッ後に 浮上りし										此夜丸亀より り善手代能 田池兵衛等 船より丸亀 屋敷伏持参		下河辺 青 木 風邪
15	同三 日	朝曇 五ッ半頃上 り晴天 此夜も晴 る	六ッ頃 ハッ頃晴着	ハッ頃晴着	岸山 稲生 文助 佐助 九ッ二十日測量 同所土原村海辺より 初 土原村 それより足津津浦海辺を過 同阿野郡御供 所白組村に松崎浦迄測		村は三四丁奥にあり			一手測 青 木見取図			我等 坂部地蔵		下河辺 青 木 風邪	
16	同四日	朝晴天	六ッ前宇足津浦立 上 我等 下河 辺 青木 稲生 宇足津浦六ッ半頃 に立上	昨日留置山出村枝部津より初 江尻村 林田村 高瀬村 青海 村を越 同村字馬場し迄測 測量人は坂部 岸山 文助 善八 此夜晴天測量 なり												
17	同五日	朝晴天	七ッ半後 青海村 大観立上	白組は四ッ後 赤組は五ッ後 生帰へ着	坂部 岸山 文助 善八 昨日留置山出村枝部津より初 江尻 乃庄村 本沢村宇大崎 阿野郡											

## 伊能忠敬『測量日記』にみる19世紀初頭における讃岐国本土の地域特性

(つづき)

[illegible]

『伊能忠敬 測量日記』(1998)より作成

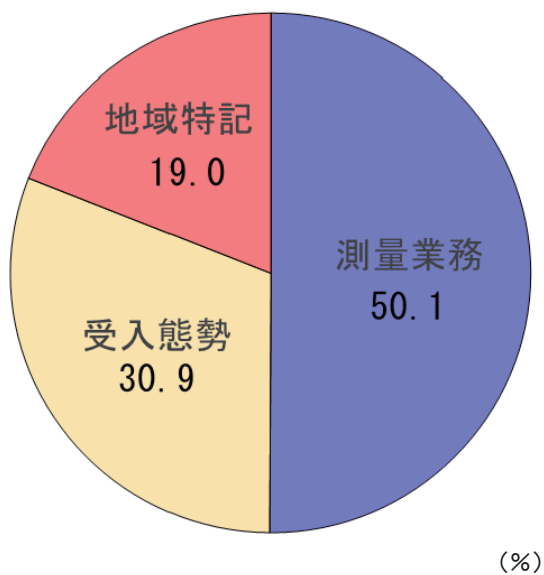


図1 測量業務・受入態勢・地域特記の割合  
(『伊能忠敬 測量日記』(1998)より作成)

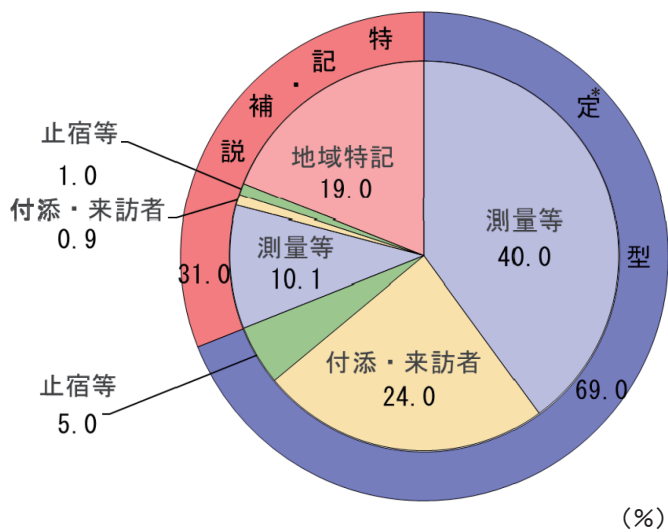


図2 定型事項と地域特記・補説事項の割合  
(『伊能忠敬 測量日記』(1998)より作成)  
\*定型は狭義のもの。

主からのものである。前述の塩飽島中(人名の自治組織)や知行寺等による贈物はみられない。『測量日記』には「丸亀侯」・「領主」・「御領主」より贈られた旨記されているが、本稿では以降「藩主」と呼ぶことにする。

各藩主は贈答に際して、測量隊内における身分(隊長・内弟子・供侍・棹取・草履取、差添〔天文方下役〕・僕〔天文方下役家来〕)に応じて品物やその数量を変え、全員に届けている。ただし、内弟子については、忠敬の次男

表2 地域特記・補説説明事項の構成

内 容	字 数	割合 (%)
地域特記事項	1,421	61.2
うち贈 物	923	39.7
名所旧跡	343	16.4
社寺・参詣	136	4.3
産業・商品	19	0.8
測量業務補説	759	32.7
うち集落補足	223	9.6
測量補足	177	7.6
移 動	100	4.3
書 状 等	71	3.1
遠 測	63	2.7
支配・所領	41	1.8
地図作製	37	1.6
病 気	28	1.2
起点補足	18	0.8
地名補足	1	0.0
止宿等補説	72	3.1
うち止宿補足	53	2.3
中食場所	12	0.5
中食場所補足	7	0.3
付添・来訪者補説	69	3.0
うち特定人物	63	2.7
付添役人	6	0.3
合 計	2,321	100.0

『伊能忠敬 測量日記』(1998)より作成

「稲生秀蔵」<sup>16)</sup>が厚遇されており、差添と内弟子の中間に位置づけられている。高松藩主より秀蔵に差添と同じ贈物が届いた際には、忠敬から減額願いが出されている(下の藩主贈物①～③の下線部の太線は伊能忠敬、波線は差添、二本線は秀蔵、一本線は秀蔵以外の内弟子である。これを参照されたい)。測量経路に従い、贈り主別、贈り先別に品物とその換金額等をまとめると、次の通りとなる(なお「歩」は「分」とした)。

①丸亀藩主の贈物

品 物 (隊長) 我等(忠敬)に晒木綿7反  
(内弟子) 秀蔵に晒木綿4反, 佐右衛門・文助に晒木綿各3反  
(供侍) 庄作に晒木綿2反  
(棹取) 佐助・善八に晒木綿各2反  
(草履取) 藤吉に鼻紙3束  
(差添) 坂部・柴山・下河辺・青木に晒木綿各5反  
(僕) 4人へ鼻紙各3束

換金額 (隊長) 忠敬は代金1両3分  
(内弟子) 秀蔵は1両, 佐右衛門・文助は各3分  
(供侍) 庄作は2分

(棹取) 佐助・善八は各2分  
(草履取) 藤吉は銀2両  
(差添) 坂部・柴山・下河辺・青木は代金各1両1分  
(僕) 4人は代銀2両

②多度津藩主の贈物

品 物 (隊長) 我等(忠敬)に晒木綿5反  
(内弟子) 秀蔵・佐右衛門・文助に晒木綿各2反  
(供侍) 庄作に晒木綿2反  
(棹取) 佐助・善八に鼻紙  
(草履取) 藤吉に鼻紙  
(差添) 坂部・柴山・下河辺・青木に晒木綿各3反  
(僕) 4人に各鼻紙

換金額 (隊長) 忠敬は代金2両2分  
(内弟子) 秀蔵は1両1分, 佐右衛門・文助は各1両  
(供侍) 庄作は1両  
(棹取) 佐助・善八は各2分  
(草履取) 藤吉は1分  
(差添) 坂部・柴山・下河辺・青木は代金各1両1分  
(僕) 4人は各1分

③高松藩主の贈物

〔入国初日〕

品 物 (隊長) 我等(忠敬)に縞縮緬5反  
(内弟子) 秀蔵に小菊20束(忠敬の申し出で15束に減)・佐右衛門・文助に小菊各10束  
(供侍) 庄作に小菊7束  
(棹取) 佐助・善八に小菊各7束  
(草履取) 藤吉に小菊5束  
(差添) 坂部・柴山・下河辺・青木に小菊各20束  
(僕) 4人に小菊各5束

換金額 (隊長) 忠敬は代銀5枚  
(内弟子) 秀蔵は1両2分, 佐右衛門・文助は各1分  
(供侍) 庄作は2分  
(棹取) 佐助・善八は各2分  
(草履取) 藤吉は2分  
(差添) 坂部・柴山・下河辺・青木は代金各2両  
(僕) 4人は各2分歩

〔高松城下〕

品 物 (隊長) 我等(忠敬)に鯖子1籠  
(内弟子) 秀蔵に杉原1束5帖・佐右衛門・文助に杉原各1束  
(供侍) 庄作に刻煙草1包  
(棹取) 佐助・善八に刻煙草1包

(草履取) 藤吉に刻煙草1包  
(差添) 坂部・柴山・下河辺・青木に杉原各2束  
(僕) 4人に刻煙草各1包

換金額 (隊長) 忠敬は代金3分  
(内弟子) 秀蔵は1分2朱, 佐右衛門・文助は各1分  
(供侍) 庄作は1貫文  
(棹取) 佐助・善八は各1貫文  
(草履取) 藤吉は700文  
(差添) 坂部・柴山・下河辺・青木は代金各2分  
(僕) 4人は各700文

〔出国前日〕 菓子一折

高松藩主が出国前日に贈った菓子一折は例外として、丸亀・多度津の両藩主(両京極家)は上級隊員に晒木綿、下級隊員に鼻紙を、また高松藩主は隊長の忠敬に縞縮緬・鯖子、ほかの上級隊員に和紙(小菊、杉原)、下級隊員に和紙(小菊)・刻煙草と、それぞれ品物と数量を変えて贈っている。これらの品物は、いずれも地元付添役人に相談のうえ換金されている。伊能忠敬に贈られた品物でみると、丸亀藩主のものは1両3分、多度津藩主のものは2両2分、高松藩主のものは銀5枚で売却されている。銀5枚は、当時の幕府三貨公定相場に基づき算出すると3両2分強である。貨幣博物館によると<sup>17)</sup>、金1両が現在のいくらになるのかは一概に言えないが、米価・かけ蕎麦価格・大工賃金(日当)の物価に基づき換算すると、それぞれ6.3万円・17.1万円・34.5万円ほどになる。最も低い米価でも、各藩主はそれぞれ約11万円、約15.8万円、約22.1万円の品物を贈っていることになる。領地の石高の高低に関わらず、訪れた順番が遅いほど贈った金額は高くなっている。

さて、当該地域の特産品としては、砂糖・塩・綿(木綿)のいわゆる「讃岐三白」および讃岐うどんが有名である<sup>18)</sup>。木綿は戦国期に西讃地方(丸亀藩)で、砂糖は江戸後期に東讃地方(高松藩)でそれぞれ生産が始められていた。塩は、詫間(丸亀藩)や屋島(高松藩)に塩田が造られていたが、1829(文政12)年に久米栄左衛門(久米通賢)の建白書提出により、坂出塩田(坂出東大浜・西大浜)が開発されてから本格化したものである。また、うどんも1702(元禄15)年の金毘羅本社屋根葺き替えを記念して元禄末に描かれたものと伝わる『金毘羅祭礼図屏風』(金刀比羅宮宝物館所蔵)にうどん店が描かれている<sup>19)</sup>ものの、これらはいずれも『測量日記』には記されていない。

ちなみに、うどんについては3月7日に洲本で「阿州侯より緘鯉鮓一箱 五色索麵一箱 寒製飴一桶御贈被



下」の記述がある。さらに3月22日には徳島城下で阿波藩主より「鯉節一箱」も贈られている。現在、うどんは讃岐（香川）、「五色索麺」は伊予松山（愛媛）、鯉節は土佐（高知 カビを利用した燻乾法の発祥地）の特産品である。土佐藩主は、5月6日に高知城下で「我等へ土佐鯉節百（略）下役四人へ土佐鯉節八十宛（略）内弟子三人へ土佐鯉節五十宛」贈っている。

讃岐3藩主の贈った品物は、伊予の松山・今治・小松・西条など各藩主のものと大きくは変わらず、北四国の伊予・讃岐間で特段の地域性はみられない。逆説的に言えば、いわゆる「讃岐三白」やうどんに対し、土佐の鯉節、あるいは現在の「讃岐うどん」のような贈答品としての価値はまだみられなかったと言えよう。また銀5枚・銀2両の記述からは、大坂を中心とする銀本位制の影響を受けている経済的な地域性の一端を窺い知ることができると言えよう。

## (2) 名所旧跡

名所旧跡については、松山・松ヶ浦および雲井の御所（現坂出市林田町・高屋町）ならびに壇ノ浦（現高松市屋島東町・牟礼町）に関する記述がみられる。

### ①松山・松ヶ浦と雲井の御所

『測量日記』には、「林田村に綾川あり、其海を松ヶ浦という。即名所なり。其所の産なりとて阿野郡の大政所渡辺与兵衛なる者忘具（『測量日記』自筆本も「具」にみえる）を送る。後拾遺に中納言定頼卿の歌、讃岐へ罷りける人に遣しける。松山の松の浦風吹よせて忍びてひ路へ恋忘具。其帰し歌、源光成、たたぬよりしほりもあへぬ衣手にまたきなへけそ松ヶ浦浪。又、霧ぬれぬ綾の川辺になく千鳥声にや友の行方を知る、藤原孝輝朝臣とあるよし。別説に中宮内侍とも。往古は綾郡。又、綾川なりしを貞享の頃より阿野郡阿野川といいなせしよし。此綾川の上に、雲井の御所というあり、崇徳天皇の配所のよし。いい伝へり御歌に、ここもまたあらぬ雲井となりにけり空行月の影にまかせて。大政所渡辺与兵衛の物語を書記しぬ」と書かれている。

『延喜式』民部下にて「凡山陽南海西海道府国、新任官人赴任者、皆取海路」と規定されており、887（仁和2）年に讃岐国司（讃岐守）として赴任した菅原道真や、1156（保元元）年に保元の乱で敗れて配流された崇徳上皇（讃岐院）は、海路にて讃岐へ入国している。木下（1977）<sup>20）</sup>によると、『菅家文草』から菅原道真は「津頭客館」に小松を植え、ここが「松山館」とも称されているとわかる。さらに松山館の置かれた場所は、讃岐の国府津に比定されている<sup>21）</sup>。『測量日記』に記された「林田村に綾川あり、其海を松ヶ浦という」とは若干位置的に

異なるが、いずれにしても「松山」・「松ヶ浦」・「松の浦」は、忠敬が記録したもの以外にも、古くから繰り返し和歌に詠まれており、讃岐の歌枕となっている（なお、後拾遺の詩（486）は「…ひろひてしのへこひわすれ貝」の誤りである）。

また雲井の御所とは、崇徳上皇が綾川を少し上ったところ（三角州性「坂出低地」上流部）にある国府に隣接する鼓岡に造営された木ノ丸殿に移るまでの約3年間を過ごした仮御所のことである。その場所については、豪族綾高遠の邸宅とも長命寺とも伝えられているが、この仮御所にて上皇が上記の和歌を詠んだため「雲井御所」と呼ばれるようになった。伊能忠敬が訪れてから約半世紀後の1835（天保6）年、高松藩主松平頼重（9代）によりその場所が推定され、雲井御所之碑が建立されている。崇徳上皇は、江戸時代後期の上田秋成による読本『雨月物語』の「白峰」などで取り上げられており、往時の人びとには菅原道真や平将門とともに広く知られた人物である。白峰山の御陵は高松藩主松平頼重（初代）をはじめ頼恭（5代）、頼聡（11代）らにより修復されていた。

これらは、特定のイメージを形成するような名所と認識されており、当該地域の特性と言えよう。

### ②壇ノ浦

『測量日記』には、「壇ノ浦は屋嶋の山東麓にて安徳帝皇居の跡あり。此海辺に那須与市駒止の石・弁慶祈の岩・佐藤次信の廟・太夫黒の駒の塚あり。何連も後人の所為なり」と記されている。治承・寿永の乱（1180・治承4年～1185・元暦2年）、いわゆる「源平合戦」において一ノ谷の戦いで敗れた平氏は、屋島（狭く浅い海峡で隔てられていた）に陣を構え、内裏を置いていた。源義経率いる源氏軍の早朝の干潮に乗じた騎馬による屋島上陸、奇襲攻撃を受け、平氏軍は舟で海上へ逃れたのち、やがて舟上から激しい矢戦を仕掛けた。この時に、佐藤継信は義経の楯となり討たれて最後を遂げている。また、那須与一が「南無八幡菩薩 我が国の神明 日光の権現 宇都宮 那須の湯泉大明神」と祈り、平家の挑発である舟上の扇の的を射落とした「扇の的」、さらには義経が弱い弓の使用を気づかれないよう、敵の迫るなか命がけで落とした弓を拾った「弓流し」等が伝えられている。屋島の戦いは『平家物語』のなかでも非常に有名である。

『測量日記』に記された「安徳帝皇居の跡」は「安徳天皇社」、「那須与市駒止の石」は「駒立岩（こま立石）」、「弁慶祈の岩」は「祈り岩（いのり岩）」、「佐藤次信の廟」は「佐藤継信の墓」、「太夫黒の駒の塚」は「大夫黒の墓」として、それぞれ現在は高松市の登録史跡となっている。ただし、これらのうち「弁慶祈の岩」については、祈っ



たのが弁慶でなく那須与一であり、また「佐藤次信」は「佐藤継信」の誤りである。さらに「太夫黒」は義経が一ノ谷の戦いの鶴越の逆落しにて乗馬した名馬であり、義経の官位、左衛門尉の位階の別称「大夫」と黒毛の「黒」にちなみ命名されたものであるため、『吾妻鏡』にある「大夫黒」が妥当であろう。『測量日記』には「何連も後人の所為なり」と一歩引いた見方をしており、義経の文字はなく、いわゆる「判官鼻眞」は感じられない。

### (3) 寺社・参詣

『測量日記』には、「朝飯後、金毘羅参詣、直に金光院へ立寄座敷一覽」、「同村八栗五剣山の下に八栗寺あり、四国八十五番札所。屋嶋山に屋嶋寺あり、四国八十四番の札所之」、「着後両手共、四国八十六番札所、古義真言宗普陀洛山清光院志度寺へ立寄、古筆画一覽す」、「此村に白鳥太神宮あり、御朱印式百石にて、神主猪熊左近という。御朱印は帰来村にあり」などの社寺や参詣に関する記述がみられる。

「金毘羅」とは、明治初年の神仏分離以前に称していた「金毘羅大権現」のことであり、当時、金毘羅参りは伊勢参り（伊勢神宮）と同様に、全国的で人気を博していた。丸亀城下から内陸へと伸びた測量線は、金毘羅社の仁王門前坂下で止まっている。仁王門は1651（慶安4）年に松平頼重が建立したもので、社領地330石の朱印も頼重の計らいで1647（正保4）年に將軍から安堵されるようになっている。参詣・観光時間も確保されており、当地への測量は金毘羅参詣が主目的と言えよう。屋島寺・八栗寺・志度寺は、それぞれ四国八十八箇所の八十四番・八十五番・八十六番札所である。江戸時代中期には概ね現在のような巡拝（遍路）形態が成立しており、篤志家による順路を示す道標も設置されるようになっていた。また、白鳥太神宮（現白鳥神社）は、神靈白鶴に化した日本武尊が止まった場所に建立されたと伝えられており、松平頼重が社殿を修築し、幕府の朱印地にあらためたところである。伊能忠敬が訪れた当時は、四国八十八箇所巡りの遍路のなかには同社も参詣する者も多かったようである。こうした金毘羅参りや四国八十八箇所巡り（遍路）には、地域特性をみることができよう。

### (4) 産業・商品

産業については、「此所塩浜あり」と記されている。「此所」の「塩浜」は、笠居村枝生嶋（現高松市生島町）に当時存在した塩田を指しており、止宿も「塩政所九郎右衛門」とみえる。塩田は、当該地域の地域性の一つと言えよう。なお「此所にて沈南頻掛物一幅を整」と記されているが、とくに地域性の指標とは言えず、また「沈南頻」

は、長崎に2年間弱滞在し写生的な花鳥画の技法を日本に伝えた沈南蘋の掛物と解され、「沈南蘋」の誤りである。

### 2) 測量業務の補説事項

測量業務の記述のなかには、測量起点に関する補説説明の「去七日測留」、同様に同作業の進め方の「手分、山越横切」・「手分、先手の初に合測」・「一手測、青木見取図」・「松崎村唐島・大見村津島、遠測」・「上馬嶋下馬嶋遠測」や、地図作成の「測量難成、地図」・「稻生は地図」等がみられる。四国横切測量後伊予からの移動に海路を用いた注記の「坂部・柴山・文助・佐助、川之江村より乗船して、同刻当浦へ着」や飛脚の「高松城下より幸便に書状も可差出と生嶋出立」は、当時の交通・通信に関する情報となる。また、集落・人家の「海辺奥人家三軒」・「人家海岸より奥二三丁に有」・「三野郡」・「人家二十軒此辺八栗山下にて、即八栗内なるべし」・「観音寺浦八ヶ所、仮屋浦、中洲浦、下市浦、上市浦、酒屋町、茂木町、鍛冶分・大工分、坂本村、合八ヶ所小町ゆえ合一町とす。町役人は別なるよし」や、知行地・石高と境界の「京極壱岐守在所」・「金毘羅社領、御朱印三百三十石」・「是迄丸亀領也、此より高松領となる（略）是より丸亀領」等も地域情報を得る記述である。なお、「下河辺・青木風邪」・「善八此日より出勤」等は、おもに汀線付近を測る伊能忠敬の全国測量の身体への負担が大きい、その一端を窺い知ることができる記述である。

### 3) 止宿等の補説事項

止宿の補説説明は、無人寺宿泊時の仮亭主名、向隣も含めた家屋の状態・亭主の家業と経済状況や藩主の立寄り等である。地域性は、中食とその補説説明にあり、金毘羅街道の測量に「高松領与北村茶所にて中食」、そして「茶所」に「セツタイという」と注記している。この「茶所」は「茶堂」（ちゃどう）の誤りで、正しくは金毘羅街道のほぼ中間に位置しかつ最大規模の「与北茶堂」<sup>22)</sup>のことである。『アメリカ伊能大図（米国）彩色図』にも「茶堂」と書かれている。四国地方では、遍路や通行人にお茶を振る舞う場所、あるいは地域住民の信仰や酒宴、懇親の場所として使用する「茶堂」が広くみられる。訪れた旅人にお茶や食事等を振る舞う風習は、地元で「お接待」と呼ばれている。すなわち、伊能忠敬測量隊は現在の日本遺産に登録されている、四国巡礼を支える「お接待」の文化に触れていたのである<sup>23)</sup>。

### 4) 付添・訪問者の補説事項

付添役人の補説は、宇足津<sup>24)</sup>浦役人について「年寄ともいう」と注記したものである。村役人の「年寄」は関東の「組頭」に当たる。『測量日記』には地方三役（村方

三役)のうち、関東の「名主」・「大名主」、東北・北陸の「肝煎」・「大肝煎」に当たる役職名について、丸亀藩・多度津藩領では「庄屋」・「大庄屋」、高松藩領では「政所」・「大政所」と記している。8月30日に伊予の新居浜浦止宿へ高松領付添役人が訪ねたときに「高松領にては、庄屋を政所というよし」と注記している。この高松藩領の地方三役の上級役職「政所」・「大政所」の名称は、地域的な特徴となっている。

訪問者を見ると、伊予の川之江村から「井川応助来て学談す」もあるが、とくに目立つのは久米栄左衛門に関する記述の多さである。8月29日の「讃州高松家中久米栄左衛門菓子箱持参来向」に始まり、「久米栄左衛門来る。深更不逢」、「高松家士久米栄左衛門来る」、「久米栄左衛門、日々出勤」、「久米栄左衛門日々付添案内、朝夕共に出る」、出国後も「高松久米栄左衛門来る」、11日「久米栄左衛門帰る」と頻出する。

この久米栄左衛門(1780～1841年)とは、大内郡馬宿(現東かがわ市馬宿)に生まれ、19歳の時に大坂で間重富に師事して数学と天文、地理、測量を学んだのち帰郷、伊能忠敬測量隊に先立ち、1806(文化3)年～1807(文化4)年にかけて高松藩の命を受け、当時の最新技術であるバーニャ副尺付の測量器具を開発し、安戸池付近等藩内を実測、角筆にて精度の高い地図を作製した人物である。伊能忠敬の来訪時にはその接伴役を務め、『測量日記』には「久米」姓を名乗っているが、正式に同姓が許されたのは1809(文化6)年に高松藩天文測量方に取り立てられ、士分を得てからである。『測量日記』に従い本稿では「栄左衛門」を用いるが、これは通称で、本名は「久米通賢」である。前述の私財を投じた坂出東大浜・西大浜の塩田開発で藩財政の危機を救った以外にも、畜力(ウシ)の揚水機や精米機の開発から、ロシアの扨捉島侵攻等に刺激された、火器を備えた軍艦の設計や輪燧佩銃(歯車式撃発銃)、風砲(空気銃)、ドンドロ付木(マッチ)、雷管式銃(マッチ発火装置を応用)等まで、数多くのものを考案・製作している<sup>25)</sup>。同郷の天才・異才と称される平賀源内(寒川郡志度生まれ、現さぬき市志度)とともに、讃岐を代表する偉大な発明家である。

## 5 まとめ

本稿では、先の報告(井村2012)にて一定の成果をみた、『測量日記』の記述内容と形態や項目別字数の割合等を指標とし、定量的に把握したうえで、とくに特記事項に留意し分析する研究方法を用いて、より記述内容の増した地域に応用し精度を高めるため、讃岐本土を対象として、19世紀初頭における地域的特徴について考察し

た。その結果は要約すると次の通りである。

19世紀初頭における讃岐本土の記述内容(7,481字、52.5%)は、大きく測量業務(3,748字、50.1%)、受入態勢(2,312字、30.9%)、地域特記事項(1,421字、19.0%)から構成されている。このうち、地域特性を考察するのに最も重要なのは地域特記事項である。ただし、測量業務と受入態勢にも補足説明があるため、これらも含めた「地域特記・補説事項」(2,321字、30.0%)を中心に、地域情報を抽出して分析する方法が最も合理的である。

地域特記事項は、贈物、名所旧跡、寺社・参詣、産業・商品からなる。このうち、最も文字数の多いのは主として諸大名(藩主)からの贈物である。丸亀・多度津の両藩主(両京極家)は上級隊員に晒木綿、下級隊員に鼻紙を、また高松藩主は隊長の忠敬に縞縮緬・鯖子、ほかの上級隊員に和紙(小菊、杉原)、下級隊員に和紙(小菊)・刻煙草と、それぞれ品物と数量を変えて贈っているが、特産品はなく、伊予の諸藩と変わらない。すなわち、いわゆる「讃岐三白」やうどんに対し、土佐の鯉節、あるいは現在の「讃岐うどん」のような贈答品としての価値はみられなかったと言えよう。

一方、名所旧跡の「松山」・「松ヶ浦」は古くから繰り返し和歌に詠まれ讃岐の歌枕となっており、「雲井の御所」も崇徳上皇が『雨月物語』の「白峰」などで取り上げられ、当時の人びとにも有名であった。また、「壇ノ浦」も『平家物語』の那須与一「扇の的」等で広く知られている。これらの名所旧跡は、讃岐本土の地域特性の一つである。さらに、丸亀城下から南進する測量線は金毘羅社の仁王門前坂下で止まっており、同社への参詣が目的と言える。屋島寺・八栗寺・志度寺など四国八十八箇所の札所も記されている。こうした金毘羅参りや四国八十八箇所巡り(遍路)にも、地域特性をみることができよう。また、産業では「此所塩浜有り」、止宿に「塩政所九郎右衛門」とあり、塩田の分布が理解でき、当該地域の特徴の一つとなっている。

補説事項では、「高松領与北茶所にて中食」の「茶所」に「セツタイという」と注記がある。これは金毘羅街道のほぼ中間に位置しかつ最大規模の「与北茶堂」のことである。四国地方は、「茶堂」で旅人にお茶や食事等を振る舞う風習があり、地元では「お接待」と呼ばれている。すなわち、伊能忠敬測量隊は「お接待」の文化に触れていたのである。また、付添役人のうち地方三役の「名主」・「肝煎」に当たる役職名が、丸亀藩・多度津藩領は西日本で一般的な「庄屋」であるのに対して、高松藩領では「政所」となっており、地域的特徴がみられる。なお、接伴役を務めた久米栄左衛門(久米通賢)は、大坂の間

重富に師事し天文、地理、測量を学んだ人物であり、高松藩の命で、当時の最新技術であるバーニャ副尺付の測量器具を開発し、安戸池付近等藩内を実測、角筆にて精度の高い地図を作製したほか、地域的特徴となっている坂出東大浜・西大浜の塩田開発や、畜力揚水機・精米機

や各種銃砲類等々を考案・製作した人物で、平賀源内とともに讃岐を代表する偉大な発明家である。

以上のように、『測量日記』の「地域特記・補説事項」から一定の地域特性を把握することができた。本稿にて取り上げなかった地域については、別稿にて報告する。

## 注・参考文献

- 1) 籠瀬良明 (1995) : 1890年劇作家チェーホフの樺太3カ月踏査—地理と文芸などの接触考—, 歴史地理学, 137, 2~20.
- 2) イザベラ・バード著, 金坂清則訳注 (2012) : 『完訳 日本奥地紀行1—横浜—日光—会津—越後』, 平凡社, 391p.  
イザベラ・バード著, 金坂清則訳注 (2012) : 『完訳 日本奥地紀行2—新潟—山形—秋田—青森』, 平凡社, 439p.  
イザベラ・バード著, 金坂清則訳注 (2012) : 『完訳 日本奥地紀行3—北海道—アイヌの世界』, 平凡社, 418p.  
イザベラ・バード著, 金坂清則訳注 (2013) : 『完訳 日本奥地紀行4—東京—関西—伊勢—日本の国政』, 平凡社, 420p.
- 3) 片上広子 (1992) : 松浦武四郎の調査記録による蝦夷地の地域構造の分析, 歴史地理学, 158, 22~36.
- 4) 米国議会所蔵伊能大図「アメリカ大図」に基づく彩色復元本であり, 日本大学文理学部は全葉所蔵する。
- 5) 井村博宣 (2008) : 「高松藩領における伊能忠敬の測量」, 香川地理学会会報, 28, 29~41.  
井村博宣 (2009a) : 「伊能忠敬の地図作製と讃岐の伊能大図」, 香川地理学会会報, 29, 20~29.  
井村博宣 (2009b) : 「伊能大図(米国)彩色図における讃岐国安戸池の地形表現」, 日本大学文理学部自然科学研究所「研究紀要」, 44, 37~44.
- 6) 井村博宣 (2011) : 「伊能忠敬『測量日記』にみる讃岐国島嶼部の地域特性」, 香川地理学会会報, 31, 35~44.
- 7) 井村博宣 (2012) : 伊能忠敬『測量日記』にみる19世紀初頭における仙台藩領沿岸地域の地域特性, 日本大学文理学部自然科学研究所研究紀要 (47), 1~11.
- 8) 佐久間達夫 (1998a) : 『伊能忠敬 測量日記』(全6巻・別巻1), 大空社.
- 9) 原本は伊能忠敬記念館所蔵の忠敬直筆本。
- 10) 東京地学協会編 (1998) : 『伊能図に学ぶ』, 朝倉書店, 262p.  
井村博宣 (2023) : 『伊能図でみる江戸後期の日本の景観』(図録), 日本大学文理学部資料館, 8 p.
- 11) 伊能忠敬記念館 (2009) : 『重要文化財—伊能忠敬関係資料』, 伊能忠敬記念館, 52p.
- 12) 伊能忠敬研究会編集部 (2008) : 「伊能景利が保存していた富士山の火山灰」, 伊能忠敬研究52, 4.
- 13) 佐久間達夫 (1998b) : 「測量日記(抄)」, 東京地学協会編『伊能図に学ぶ』, 237~254. この表題は、昭和27(1952)年の旧文部省による装丁修理(担当: 田山方南技官)の際に付けられ、以降、両表題がそれぞれの通称となっている。
- 14) なお、伊能忠敬と伊能図の大事典をつくる会より、伊能忠敬記念館所蔵の原本に基づく『伊能忠敬測量日記(DVD)』と佐久間氏活字本を母体とした活字化CDが出されており、高く評価したい。ただし本稿では、前者は異体字が多用され草書体(崩し字)で書かれた原本の画像である。両者とも購入が必要であり、その費用負担等も勘案し、全国の主要図書館での所蔵率も比較的高い『伊能忠敬 測量日記』を用いることにした。
- 15) 大坂町奉行所支配下で年寄衆が政務を執る形態。
- 16) 第5次測量時の不行状のため、第6次測量では「伊能」姓から「稲生」姓に変更されている。なお、のち1815(文化12)年には勘当され、1824(文政7)年からは「神保」姓を名乗っている。
- 17) 貨幣博物館: 江戸時代の1両は今のいくら?—昔のお金の現在価値—  
URL <https://www.imes.boj.or.jp/cm/history/edojidaino1ryowa/> 2023年9月30日検索
- 18) 香川県: 香川の風土から生まれた讃岐三白  
URL [https://www.pref.kagawa.lg.jp/documents/14715/44\\_53.pdf](https://www.pref.kagawa.lg.jp/documents/14715/44_53.pdf) 2023年9月30日検索  
井村博宣 (2015) : 香川県の観光資源に対する県外者の認知変化とその要因—讃岐うどんブームを境として—, 香川地理学会会報35, 23~27.  
井村博宣 (2016) : 旅行経験に伴う地域イメージの変化—香川県に対する大学生の事例—, 香川地理学会会報36, 24~29.
- 19) 農林水産省: うちの郷土料理 香川県 しっぽくうどん URL [https://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/k\\_ryouri/search\\_menu/menu/sippoku\\_udon\\_kagawa.html](https://www.maff.go.jp/j/keikaku/syokubunka/k_ryouri/search_menu/menu/sippoku_udon_kagawa.html) 2023年9月30日検索
- 20) 木下 良 (1977) : 国府の「十字街」について, 歴史地理学会紀要19, 5~32.
- 21) 島方洗一企画・総編集、金田章裕・木下 良・立石友男・井村博宣 (2009) : 『地図でみる西日本の古代』, 平凡社, 294p.
- 22) 善通寺市: 善通寺市デジタルミュージアム 与北の茶堂  
URL <https://www.city.zentsuji.kagawa.jp/soshiki/50/digi-m-culture-detail-035-index.html> 2023年9月30日検索
- 23) 文化庁: 「四国遍路」~回遊型巡礼路と独自の巡礼文化~  
URL <https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/stories/story015/> 2023年9月30日検索
- 24) 『測量日記』には、「宇多津」とその古い表現である「宇足津」・「鵜多津」が混在する。
- 25) 松村雅文ほか (2006) 「久米通賢に関する基礎的調査・研究」2005年度科研費実績報告書。